気候変動時代のワイン地図

ニューワールドワイン、温暖化の最前線



アメリカ・オーストラリア・ニュージーランド・南アフリカ・チリ&アルゼンチン
5つの産地が直面する変化と、その適応の最前線

イントロダクション

なぜ「ニューワールド」が温暖化の最前線なのか

欧州の伝統的な産地が数百年にわたるアペラシオン制度の中にあるのに対し、南北アメリカ・オセアニア・南アフリカなど「ニューワールド」の産地の多くは、比較的新しく切り拓かれてきた。その若さと身軽さゆえに、気候変動の影響を早く、そして顕著に受けると同時に、新しい適応策をいち早く試す実験場にもなっている。



比較的新しい産地

本格的なワイン産業の多くは19〜20世紀以降に確立され、栽培規則の縛りが欧州ほど強くない。



温暖化の影響を先取り

大陸性・乾燥気候の産地が多く、わずかな気温上昇が収穫時期や品質に直結しやすい。



適応の実験場に

規制の自由度を生かし、新しい土地・品種・技術へ素早く舵を切る動きが世界の先端事例となっている。

気温が2℃上昇すれば、
世界のワイン産地の70%が岐路に立つ

70%

産業革命前と比べて気温が2℃上昇した場合に、栽培条件が著しく悪化する、あるいは不適地となる恐れがあるとされる、世界のワイン産地の割合。

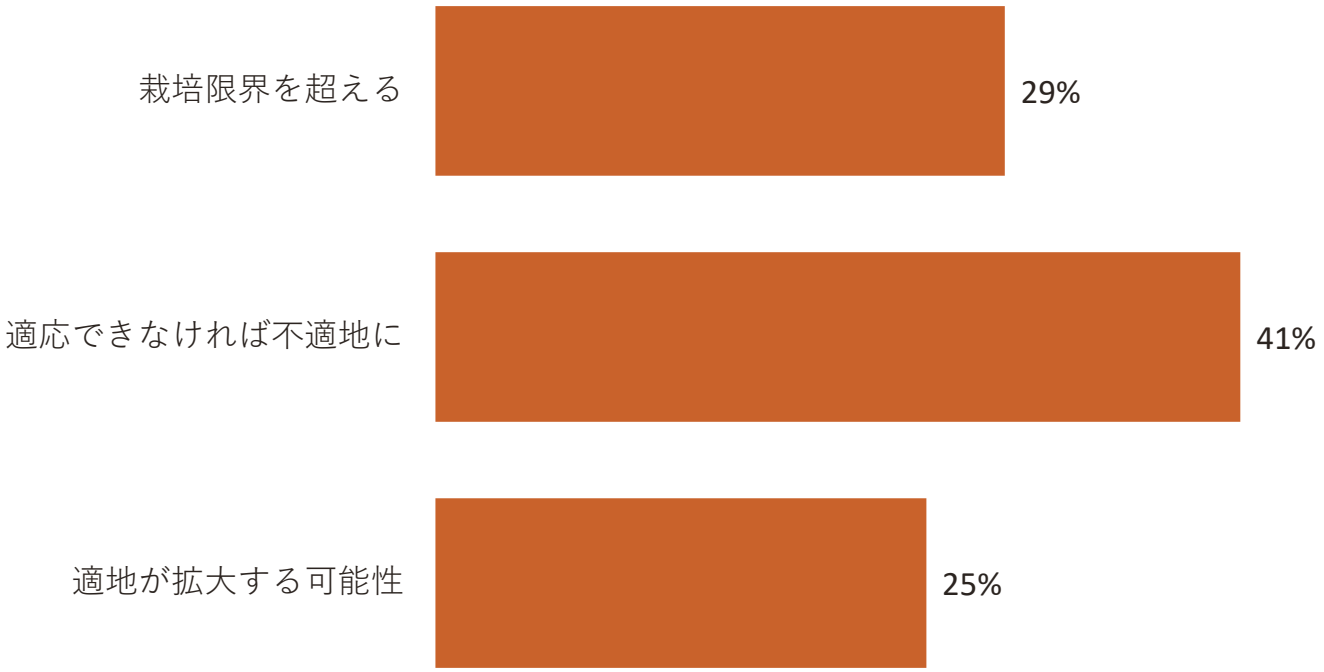
特に低地・沿岸部の産地では影響が大きく、今世紀末までにギリシャ、イタリア、南カリフォルニア、スペインなどの一部産地では、最大90%が姿を消す可能性があるとの指摘もある。

出典: Nature Reviews Earth & Environment誌（2024年4月）

内訳

「70%」の内訳 — 産地ごとに異なる未来

気温2℃上昇のシナリオでは、すべての産地が一様に打撃を受けるわけではない。栽培限界を超えてしまう産地がある一方、適応次第で持ちこたえられる産地、逆に適地が広がる産地もある。



29%

高温・乾燥が生育に適さないレベルに達し、既存品種での生産が困難になるとされる産地の割合。

41%

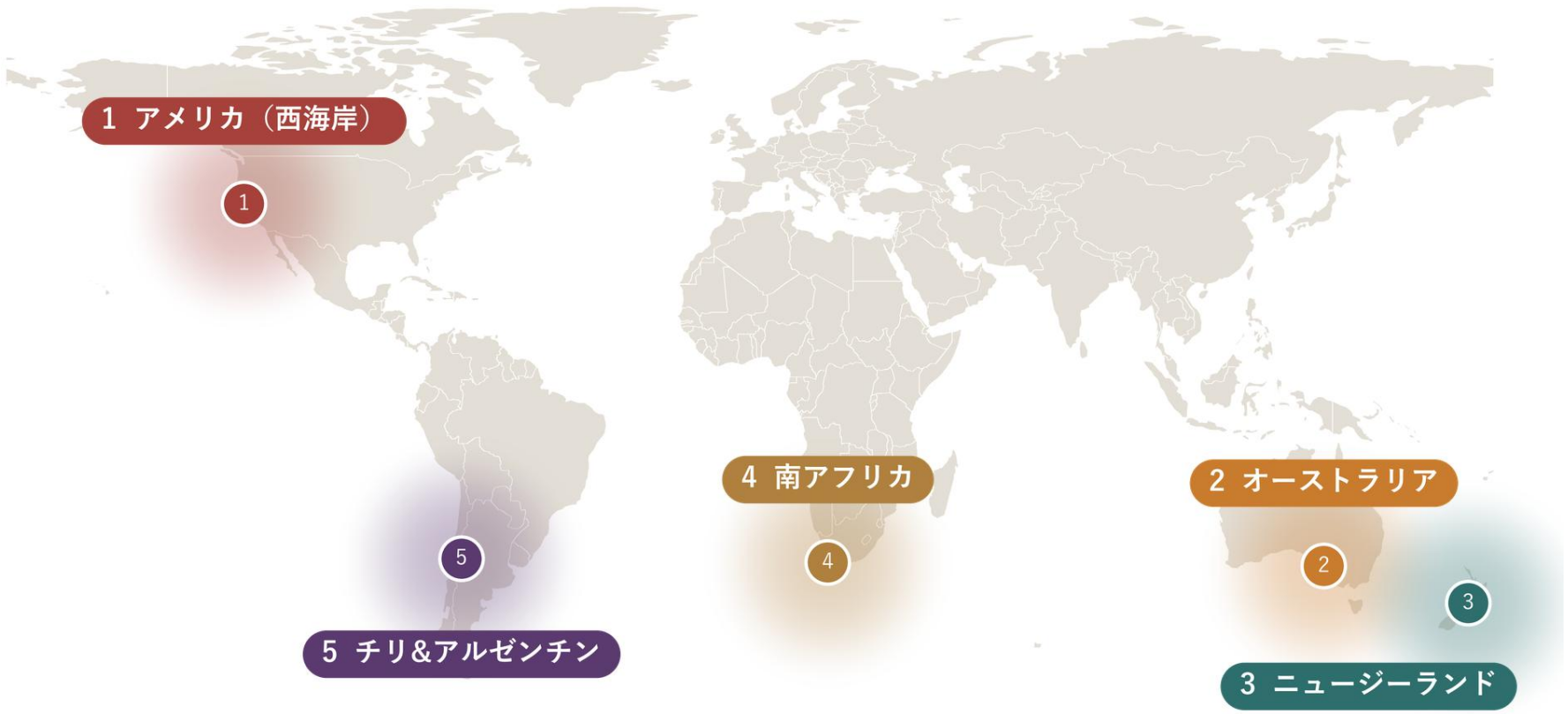
灌漑や品種転換などの適応策を講じない場合、栽培に適さなくなる恐れがあるとされる産地の割合。

25%

高緯度・冷涼地域を中心に、気候変動で新たにワイン栽培に適した土地が生まれるとの予測もある。

全体像

気候変動の最前線に立つ、5つの産地



1 アメリカ（西海岸）

山火事とスモークテイント

2 オーストラリア

熱波と慢性的な水不足

3 ニュージーランド

収穫期の早期化

4 南アフリカ

深刻化する干ばつ

5 チリ&アルゼンチン

アンデスの水資源減少

産地 01 — アメリカ（西海岸）

カリフォルニア、山火事という新常態

ナパやソノマをはじめとする西海岸の産地では、気温上昇と山火事の激化が、栽培そのものの前提を揺るがし始めている。

深刻化する山火事気象

極端な山火事気象条件に達する年数は、今世紀後半には最大21年（現状比）に達すると予測。ナパ・ソノマでは栽培適性の大幅な低下が見込まれる。

拡大するスモークテイント問題

2025年にもナパで山火事が6,800エーカー超を焼き、農地約1,500エーカーが被害を受けた。被害額は数千万ドル規模にのぼる。

適地は北へ、そして高地へ

メンドシーノやモントレーなど北部産地は適性が高まる一方、山火事リスクとの両立が新たな課題となっている。

+4〜5℃

今世紀後半、高排出シナリオ（RCP8.5）下で予測される最低気温の上昇幅。生育期の積算温度も600〜700度日増加すると予測される。

産地 02 — オーストラリア

灼熱の大陸で磨かれる、水と向き合う技術

バロッサやマクラーレン・ヴェールなど温暖な産地は慢性的な水ストレスに直面し、精密灌漑と再生水の活用が生命線になっている。



6,000ML+

マクラーレン・ヴェールでブドウ樹の50%以上に使われる、年間の再生水灌漑量（メガリットル）。慢性的な水不足への代表的な対応策。



スモークテイントの脅威

2019年の大規模森林火災以降、スモークテイント研究が本格化。バロッサ、クレア・ヴァレーなど温暖な産地は特に水ストレスが大きい。



精密灌漑への投資

点滴灌漑とデータに基づく土壌水分管理により、カベルネ・ソーヴィニヨンで灌漑効率が最大41%向上した事例も（2023年の研究）。



業界目標として掲げる脱炭素

Wine Australiaは2030年までにCO2排出量42%削減を目標に掲げ、2020年公表の「気候アトラス」で2100年までの予測を提供している。

産地 03 — ニュージーランド

早まる収穫、変わりゆくソーヴィニヨン・ブランの個性

マールボロをはじめとする主要産地では、開花から収穫までの生育暦そのものが、この数十年で明らかに前倒しになっている。

開花時期も加速

過去25年で開花時期は7〜10日ほど早まったとされる。今世紀末までに、さらに約3週間前倒しになるとの予測もある。

気候はカリフォルニア並みに？

研究者は、今世紀末までにマールボロの気候がカリフォルニアやオーストラリア・ハンター・ヴァレーに近づく可能性を指摘している。

耐病性品種への模索

看板品種ソーヴィニヨン・ブランの風味変化への懸念から、耐病性に優れる新品種の導入検討が進む。

3〜4週間

マールボロなど主要産地で、この数十年の間に収穫時期が前倒しになったとされる期間。2026年は記録的な早さの収穫となった。

産地 04 — 南アフリカ

都市と畑が水を分け合う、ケープの渇き

ステレンボッシュをはじめとする西ケープ州の産地は、慢性的な少雨に加え、都市部との水資源の競合という課題にも直面している。

30%減

西ケープ州で2050年までに予測される年間降水量の減少幅。地球全体では今世紀中に約3℃近い気温上昇が見込まれるとの試算もある。

ケープタウンとの水の奪い合い

ステレンボッシュから1時間足らずのケープタウンも慢性的な水不足に直面。雨が減れば水は都市生活者に優先されるとの声もある。

「たまに降る、激しい雨」への転換

降雨の頻度は下がる一方、一度に降る雨の強度は増す傾向にあり、洪水リスクも高まっている。

地形に沿った作り直し

畑を等高線に沿って作り直し、貯水池や排水設備を整備。水を大量に使う松の伐採と在来低木の植栽も進む。

産地 05 — チリ&アルゼンチン

アンデスの雪解け水に頼る産地の岐路

アンデス山系からの雪解け水で灌漑を支えてきたチリ・アルゼンチンの産地は、記録的な少雨と水資源の減少に直面している。

5〜6年続いた記録的少雨

年間降水量は平年より25〜45%少ない状態が続いた。南緯35度以南では観測史上例のない規模の干ばつとされる。

メンドーサは年間降水量わずか200mm

アルゼンチン・メンドーサはもともと年間降水量約200mmの乾燥地。気候変動により降雹・霜・強風「ゾンダ」の頻度が増しているとされる。

標高の高いウコ・ヴァレーへ

2010〜2021年、高標高のウコ・ヴァレーのブドウ畑面積は20.7%拡大した一方、州全体では3.4%減少。冷涼な高地への移動が加速している。

最大90%減

2010年代に中央チリを襲った「メガドラウト（大干ばつ）」により、河川流量・貯水量・地下水位が減少した割合（ピーク時）。南緯30〜38度の主要産地を襲った。

共通する課題 01

山火事とスモークテイント ― 太平洋を挟む共通の脅威

スモークテイント（煙臭汚染）とは、山火事の煙に長時間さらされたブドウから、焦げた灰のような不快な香りがワインに移ってしまう現象。近年、アメリカとオーストラリアの主要産地で、その対策が栽培・醸造の重要テーマとなっている。

アメリカ西海岸

2025年、ナパの山火事はブドウ畑を含む農地約1,500エーカーに被害を与え、損失は数千万ドル規模にのぼった。

オーストラリア

2019年の大規模森林火災を機に、オーストラリアワイン研究所がスモークテイント研究を本格化。炭素系清澄剤による除去技術の開発も進む。

- **夜間・早朝収穫で煙のリスクを回避**
- **収穫前のスモークテイント検査**
- **保護コーティングや樹冠管理の工夫**

共通する課題 02

乾きとの共存 — 水をめぐるニューワールドの知恵

南アフリカ、チリ&アルゼンチン、オーストラリア。乾燥・半乾燥気候に位置するこれらの産地では、水資源の確保と効率的な利用が生産の生命線となっている。

南アフリカ

貯水池・雨水利用システムを整備し、水を大量消費する松林を伐採。農業用水の自給力を高める取り組みが進む。

チリ&アルゼンチン

点滴灌漑とアンデスの融雪データを組み合わせた精密灌漑を導入。より涼しく水資源の安定した高標高への移転も進む。

オーストラリア

再生水灌漑（マクラーレン・ヴェールで年間6,000メガリットル超）や土壌水分センサーにより、灌漑効率を最大41%向上させた例も。

比較まとめ

5つの産地をひと目で

産地	主な気候リスク	象徴的な数字	主な適応策
アメリカ （西海岸）	山火事・ スモークテイント	最低気温 +4〜5℃ （今世紀後半予測）	北部・高地への移転、 山火事対策技術
オーストラリア	熱波・ 慢性的な水不足	再生水灌漑 年6,000ML超	精密灌漑、 2030年までに排出42%減目標
ニュージーランド	生育期の早期化	収穫時期 3〜4週間前倒し	耐病性品種の 導入検討
南アフリカ	深刻化する 干ばつ・水不足	年間降水量 2050年までに30%減予測	地形に沿った作付け、 雨水利用
チリ& アルゼンチン	アンデス 水資源の減少	河川流量など 最大90%減（干ばつ時）	高標高への移転、 精密灌漑

共通するパターン

5つの産地に共通する、4つの変化



適地は高く、涼しく

海抜の高い土地や、より高緯度・冷涼な地域へと、ブドウ栽培の重心が移りつつある。



水は最も希少な資源に

灌漑技術の高度化と再生水・雨水の活用が、乾燥地域の産地における生命線となっている。



早まる暦

開花・収穫の時期が数週間単位で前倒しになり、ワインのスタイルにも影響を与え始めている。



科学と経験の融合

気候データ・精密農業技術と、造り手の経験知を組み合わせた適応が、次の一手を左右する。

ニューワールドの強み

身軽さこそ、最大の武器

多くのニューワールド産地には、欧州のような厳格なアペラシオン規制がない。栽培する品種、畑の場所、灌漑の可否——これらを比較的自由に選べることが、気候変動への適応スピードを大きく左右している。

品種を自由に選べる

気候に適した新品種・クローンへの切り替えが、規制に縛られず迅速に行える。

新たな産地の開拓

これまで注目されなかった、より冷涼な土地の開拓が各地で進んでいる。

技術導入への機動力

精密農業やデータ活用など、新しい技術を現場に取り入れる文化がある。

例えば、オレゴン州の新興産地やニュージーランド・ワイパラ、南アフリカ・ヘメル・アン・アールデなど、これまで無名だった冷涼な土地が、気候変動下の新しい産地として注目を集めつつある。

むすびに

変わりゆく気候の中で、次の一本を探して

ニューワールドのワイン産地は今、地球規模の気候変動という試練の最前線に立っている。しかしそれは同時に、新しい産地、新しい品種、新しい技術が生まれる、挑戦の最前線でもある。

「次にグラスを傾けるとき、その一本がどんな気候の物語を背負っているか、想像してみてほしい。」



参考文献・出典

- Eos, “Climate Change Threatens 70% of Winemaking Regions” (2024)
- Nature Reviews Earth & Environment, Gambetta et al., “Climate change impacts and adaptations of wine production” (2024年4月)
- Frontiers in Climate, “Dual pressures of climate change and wildfire hazard on wine-growing potential in California” (2026)
- The Drinks Business, “Napa wildfires threaten vineyards as harvest approaches” (2025年8月)
- Wine Enthusiast, “In Australia, Winemakers Are on the Forefront of Mitigating Climate Change”
- Wine Australia, “Australia’s Wine Future: A Climate Atlas”
- 1News (NZ), “Grape expectations as winemakers experience earliest vintage” (2026年2月)
- phys.org / AFP, “Wine growers ‘on tip of Africa’ race to adapt to climate change” (2024年4月)
- Great Wine Capitals, “Mendoza deals with climate change: exploring higher altitudes”
- Hydrology and Earth System Sciences (HESS), “The 2010–2015 megadrought in central Chile” (2017)

この資料は、一般の読者向けに公開情報をもとに作成しました。